

## アミアンの庭とダイヤモンドの房飾り

## 『三銃士』の粉本

田島俊郎

Le jardin d'Amiens et les ferrets en diamant

-Des origines des *Trois Mousquetaires*-

TAJIMA, Toshiro

## Résumé

Dans les *Trois Mousquetaires*, Anne d'Autriche, reine de France, et le Duc de Buckingham, favori du roi d'Angleterre ont un rendez-vous secret dans le palais du Louvre. Lors cette entrevue ils se souviennent de leur rencontre trois ans auparavant dans un jardin d'Amiens. Cette rencontre n'est pas une invention de Dumas. Plusieurs mémorialistes ont laissé des témoignages de cet épisode dans un jardin d'Amiens. Une autre anecdote célèbre, celle des ferrets en diamant remis par la Reine à Buckingham, volés par Milady et parvenus dans les mains de Richelieu, n'est pas non plus inventée par Dumas. La Rochefoucauld donne, dans ses *Mémoires*, une autre version de l'aventure des ferrets.

L'objectif de cette étude est de comparer ces témoignages et de distinguer entre la réalité historique et les éléments de fiction ajoutés par Dumas. Dans la première partie, nous voulons examiner l'affaire du jardin d'Amiens. Ensuite, nous étudions la version que donne La Rochefoucauld

de l'aventure des ferrets. Et à la fin, nous voyons des réactions des contemporains à travers certains œuvres littéraires.

Ce qui nous impressionne le plus, c'est que, à l'époque, l'amour de la reine et du favori du roi d'Angleterre était pris pour un fait réel que l'on pouvait évoquer ouvertement. Vincent Voiture a écrit un poème sur l'affaire d'Amiens. Le Poète l'a récitée devant Anne d'Autriche elle-même, et la reine l'a non seulement acceptée mais aussi appréciée.

## 1 はじめに

アレクサンドル・デュマの『三銃士』 (*Les Trois Mousquetaires* d'Alexandre Dumas) は、フランス王ルイ 13 世 (Louis XIII) の妃アンヌ・ドートリッシュ (Anne d'Autriche) とイギリス王チャールズ 1 世 (Charles 1er) の寵臣バッキンガム公爵 (Georges Villiers, duc de Buckingham) の恋を物語の背景としている。われわれはデュマの筆によって虚構の世界に引き込まれてしまうのだが、この世界がそれなりに事実に立脚していることも知っている。アンヌ・ドートリッシュやバッキンガム、シュヴルーズ公爵夫人 (Marie de Rohan, connétable de Luynes, Puis duchesse de Chevreuse) はもちろん、言及されるだけのラ・ポルト (Pierre de la Porte)、王妃付きの厩舎長のピュタンジュ (Guillaume Morel, sieur de Putange)、リシュリューのスパイ役を割り振られたラノワ夫人 (Mme de Lannoy)、イギリスからやって来たホランド伯爵 (Lord Kensington, milord Riche, comte de Holland) なども実在したこと、さらにダルタニャンやアラミスも実在の人物であり、『三銃士』前半の山場であるダイヤモンドの房飾りをめぐる冒険にも 17 世紀の証言が存在することを知っている。『三銃士』前半で語られるアミアンの事件と房飾りの冒険について、17 世紀の証言を比較し、デュマはこの枠組みに何を加え何を捨てて物語を作ったか、さらにその時代には事件はどう理解され語られたか、考察する<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> バッキンガムは Boucquinqunt や Bouquinquam などと綴られ、ブッキンカンと呼ばれていたのだろうが、われわれの耳になじんだ英語の音を写す。ホランド Holland は Olland と綴られてオランと呼ばれたに違いないが、カーライル Carlile もカルリールと呼ばれたのかもしれないが、英語音を写す。

## 2 『三銃士』によるアンヌ・ドートリッシュとバッキンガム

アンヌ・ドートリッシュとバッキンガムの恋は『三銃士』の重要な背景である。主人公ダルタニャンは実在の人物である。1661年にフーケ(Nicolas Fouquet, vicomte de Vaux)を逮捕した人物として歴史の表にも名前を残している。ダルタニャンやアトスなど主要な人物のモデルについては、すでに日本語でも多くが語られているのでここでは述べない<sup>2</sup>。

まず『三銃士』の前半をおさらいしてみよう。物語は1625年4月の第1日曜日に始まる。前景はダルタニャンの成長と冒険の物語だが、後景は王妃アンヌ・ドートリッシュとバッキンガム公爵のルーヴルでの面会、さらにアンヌ・ドートリッシュがバッキンガムに与えたダイヤモンドの房飾りをめぐる冒険である。フランス王妃アンヌ・ドートリッシュを恋するバッキンガムは、先年の騒動でフランスへの入国を拒否されている。リシュリューの謀略でパリに呼び寄せられたバッキンガムは、シュヴルーズ公爵夫人や王妃の小間使いであるボナシュー夫人の手引きにより、リシュリューの裏をかいてルーヴルへ忍び込む。思い出の品を所望するバッキンガムにアンヌ・ドートリッシュはダイヤモンドの房飾りを与える。ダイヤモンドの房飾りが見当たらないとの報告を受けたリシュリューはそれがバッキンガムに渡されたと判断し、王妃の不貞の証拠として切り取るよう、イギリス滞在中のミレディに命じる。盗難に気づいたバッキンガムは、盗まれた房飾りの国外脱出を阻止しようとイギリスの港を封鎖する。同時に房飾りの複製を作らせアンヌ・ドートリッシュに戻すべくダルタニャンに託す。

### 5 回の出会い

バッキンガムと王妃アンヌ・ドートリッシュは5度顔をあわせている。第11章でバッキンガムはボナシュー夫人の手引きでルーヴルに入り込みアンヌ・ドートリッシュに会うのだが、その場でこれまでの4回について描写している<sup>3</sup>。

最初は1622年前後(1625年から3年前)。バッキンガムはルーヴルを訪れている。この時のアンヌ・ドートリッシュの出で立ちをバッキンガムは詳細に記憶している。またポルトスはその時バッキンガムの服からこぼれた真珠を二

<sup>2</sup> 各訳書の解説、佐藤賢一。

<sup>3</sup> Dumas, p.143 et sqq. 生島訳 192 ページ以下、鈴木訳 214 ページ以下。

粒ひろって一つ 10 ピストールで売り払ったと言っている<sup>4</sup>。

2 度目はシュヴルーズ公爵夫人宅での出会い。この出会いについて詳細は述べられない。

3 度目はアミアンの庭である。この時は二人きりで、王妃はバッキンガムに腕をとられて散歩している。バッキンガムの熱意にかろうじて踏みとどまったアンヌ・ドートリッシュは人を呼ぶ。アンヌ・ドートリッシュはそれ以上詳しくは話さない。しかしアラミスが、王妃の厩舎長ピュタンジュに命じられて自分がバッキンガムを取り押さえた、と話している<sup>5</sup>。その後ピュタンジュとその場に居たとされるヴェルネ夫人 (Vernet) とが事件の責任を問われ侍従職を解かれ、シュヴルーズ公爵夫人も勘気を被ったとされる。

4 度目はその 1 週間後、アンヌ・ドートリッシュはアミアンの騒動に対して無言で許しを与えている。

そして 5 度目がこの面談である。バッキンガムは、ボナシュー夫人に手引きされ、偶然出会ったダルタニャンに護衛され、ルーヴルに忍び込む。面会を果たして記念の一品を求めるバッキンガムに、アンヌ・ドートリッシュは夫ルイ 13 世から贈られたダイヤモンドの房飾りを与える。

王妃の女官ラノワ夫人から、房飾りを収めた小箱がなくなったとの報告を受けたリシュリューは、12 個の房飾りのうち 2 個を切り取ることをミレディに命じている<sup>6</sup>。バッキンガムは 12 個すべてを身につけて舞踏会に出席し、2 個をミレディに切り取られた。

もちろんこれらの話は虚構である。しかしアミアンの庭でアンヌ・ドートリッシュとバッキンガムの出会いがあったことには複数の証言が残る。複数の証言から推測される事実は何のようなものか、事実とデュマの虚構の境目がどこにあるのか、デュマは何を取り<sup>7</sup>、何を捨てて物語を作ったのか検証する。

4 Dumas p106. 生島訳 144 ページ、鈴木訳 157 ページ。

5 Dumas, p.106. 生島訳 144 ページ、鈴木訳 158 ページ。

6 Dumas, p.169. 生島訳 230 ページ、鈴木訳 255 ページ。

7 本稿では触れないが、この密会の場で二人が話題にするバッキンガム暗殺の予兆の夢に類似の話をタルマン・デ・レオが述べている。ただし夢を見たのはアンヌ・ドートリッシュではないし、この挿話をデュマが利用したかどうかはわからない。Talleyrand des Réaux, II, p.785.

### 3 アミアンの庭で

『三銃士』では、バッキンガムのフランス入国が許されなくなる原因を 1625 年の 3 年前に起きたとされるアミアンの事件においているが、現実には事件はまさに 1625 年に起きている。バッキンガムとアンヌ・ドートリッシュの関わり、ことにアミアンの事件の実際はどのようなものであったかを確認しておこう。

#### バッキンガム

バッキンガムは 1592 年生まれ。ジェームズ 1 世の寵臣になり、1619 年には提督に任命される。父王と同時に王太子チャールズの信頼も得ている。オランダと対抗する必要上スペインとの接近を図り、1623 年チャールズ皇太子とスペイン王女マリアとの結婚を計画する。

バッキンガムは 1623 年 3 月、マドリッド訪問の往路にパリによって王妃アンヌ・ドートリッシュを見ている。incognito (お忍び) での旅行だったようだが、リュクサンブール宮殿でのバレエで女神を演じるアンヌ・ドートリッシュを見ている。このお忍びの貴人をリュクサンブール宮殿に案内したのはアンヌ・ドートリッシュに仕えたモンバゾン (Montbazou) 公爵、シュヴルーズ公爵夫人の父親である。アンヌ・ドートリッシュを含め女性たちのあこがれの的となり、ルイ 13 世はそれに嫉妬したという。1625 年にフランスがバッキンガムを忌避していたことは事実である。

スペイン王女との結婚話は不調に終わった。そこでイギリスはルイ 13 世の末の妹アンリエットをチャールズ王太子の妃に迎えると方針を変える。結婚相手を変えるだけではなく大陸での同盟者をスペインからフランスに替える訳である。

翌年チャールズとフランス王妹アンリエットとの結婚を申し出る。結婚話をまとめるために大使としてイギリスからホランド伯とカーライル伯がパリを訪れる。大使一行はチャールズ王太子とはいとこにあたるシュヴルーズ邸を宿舎とする。

なぜ新教徒のチャールズ王太子にカトリックのスペイン王家かフランス王家の王女を妃と迎えようとするのか。

イギリスは大陸に足がかりを必要とする。イギリスと向かい合うのはスペイ

ン領のフランドルとフランスであり、両方とは行かなくてもいずれかの好意は得ておく必要がある。

ハプスブルグ家のスペインにとってはオランダの独立を阻止するためには、スペイン本国からフランスを迂回してフランドルに至る通路の確保が必要であった。英仏海峡を安全に通過するには少なくともイギリスとの敵対的な関係は解消する必要があった。

フランスは国内的にはユグノーの勢力を削ぐ政策をとっているが、ドイツ諸邦を分裂状態にとどめるためには、神聖ローマ帝国内の新教派とは同盟関係を結んでいる。ハプスブルグ家のスペインとの対抗する必要上、新教徒のイギリス王にカトリックの王女を嫁がせることに目をつぶろうとする。王妃と随員のイギリス国内でのカトリック信仰の自由と、生まれるかもしれない子どもを母親が教育する自由が与えられることを条件に。

1625年3月にはジェームズ1世が崩御し、王太子が新たなイギリス王チャールズ1世として即位するが、新王の信頼も得ていたバッキンガムは引き続いて権力を掌握し続ける。婚儀も予定通り進行し、5月シュヴルーズ公爵をチャールズ1世の代理に立てて、アンリエット王女の結婚が成立する。ルイ13世に忌避されていたバッキンガムは、デュマが設定したように極秘にではなく、新王妃をイギリスに連れ帰る特命大使として、正々堂々と5月24日パリを訪れる。この時の宿舎もシュヴルーズ邸であった。

この滞在中にバッキンガムはランブイエ邸も訪れたはずである。ランブイエ邸の常連ポーレ嬢 (Angélique Paulet) の美声を聞きたいとバッキンガムが所望したからである<sup>8</sup>。ちなみにシュヴルーズ邸とランブイエ邸は、サントノレ通りのパレ・ロワイヤルからセーヌ河の方角(南)に向けてかつて存在していたサン・トーマ・デュ・ルーヴル (Saint-Thomas du Louvre) 街に隣り合って東向きに建っていた。北側にランブイエ邸があり、その南にシュヴルーズ邸があった。今はルーヴルの中庭に取り込まれてしまっている。現在ガラスのピラミッドの建つあたりである。

6月2日 アンリエットはイギリスに向けてパリを出発。ルイ13世もコンピエーニュまで同道した。王太后マリー・ド・メディシスと義姉アンヌ・ドートリッシュはそれより先アミアンまで同行した。6月7日、アミアン着。マリ

---

<sup>8</sup> Tallemant des Réaux, I, p.64.

ー・ド・メディシス、アンヌ・ドートリッシュとアンリエット・ド・フランスの3人の王妃は別々の宿舎に投宿した<sup>9</sup>。事件はそこで起こった。

### 証言者たち

この事件については様々な証言が残されている。アンヌ・ドートリッシュの衣装係侍従ラ・ポルト、在ロンドンのフランス大使ブリエンヌ、アンヌ・ドートリッシュの後年の女官モットヴィル夫人、ラ・ロシュフコー、タルマン・デ・レオの順で見て行こう。

### ラ・ポルト

『三銃士』ではボナシュー夫人の名付けの親として話題にのぼるラ・ポルトは、現実にはアンヌ・ドートリッシュの衣装係侍従であり、アミアンにも同行していた<sup>10</sup>。証言を残している者の中では、事件を最も直接的に見聞きできる立場にあった。

シュヴルーズ夫妻は妹君にイギリスまで随行された。王太后マリー・ド・メディシス殿下と王妃アンヌ・ドートリッシュ殿下はアミアンまで同行された。その地でこのご三かたはショーヌ氏<sup>11</sup>の3人の子どもの代母をつとめられた。この町に滞在されていたあいだ、ご三かたは別々の宿舎にとどまられた、ご三かたが一緒にお泊まりになるだけの場所がなかったからである。王妃（アンヌ・ドートリッシュ）はソヌ川沿いに非常に大きな庭のある家にお泊まりであった。そこをご一行が毎夜散策され、口さがない人々に悪意を發揮する機会を大いに与える出来事が起こった。ある穏やかな夜、夜遅く散策されることを好まれた王妃がその庭におられた時のこと、バッキンガム卿が王妃の手を取り、リッチ卿がシュヴルーズ夫人の手を取っていた。ながく

<sup>9</sup> Tallemant des Réaux, I, p.909.

<sup>10</sup> Pierre de la Porte、1603年生まれ、1680年没。1621年からアンヌ・ドートリッシュに衣装係として仕える。1625年、この事件により侍従職を逐われる。その後復帰するが1637年にはアンヌ・ドートリッシュによるスペインとの秘密通信に関与してバスティーユに投獄される。

<sup>11</sup> Honoré d'Albert, sieur de Cadenet, duc de Chaulnes は故リュイヌ元帥 (Luynes) の弟つまりシュヴルーズ夫人にとっては義理の弟にあたる。リュイヌ元帥兄弟の間は親密だったとタルマン・デ・レオは述べている。Tallemant des Réaux, I, p.157. この人物が王妃たちの宿舎の手配をしたはずである。

散策されたのち、王妃とご婦人がたはしばらく休息された。その後王妃は立ち上がられた。小径の角を曲がった時、おつきのご婦人がたは少しはなれていた。バッキンガム公は王妃と二人きりになったのに気付くと、明るさを追い払い始めた暗闇を幸いに無礼にも王妃を愛撫するほどに大胆に振る舞った。王妃は声を上げられ、みなが駆けつけた。王妃を目で追っていた厩舎長のピュタンジュが最初に駆けつけ、公爵を取り押さえた。公爵は非常に混乱しており、もしピュタンジュが放さなければ、その後は非常に危険なことになっていたことだろう。みなが駆けつけ、公爵は逃げ去り、できる限り物事を穏便に済ませることにされた。(La Porte, p.6-7.)

ラ・ポルトはアンヌ・ドートリッシュに最後まで忠誠を尽くした人物なので、王妃に不利な証言は遠慮しただろうし、表現は和らげられているはずである。シュヴルーズ夫人は愛人のリッチ卿つまりホランド伯と共にいたことがわかる。この二人はアンヌ・ドートリッシュとバッキンガムから意図的に遅れたのだろうか。ピュタンジュに取り押さえられたバッキンガムはかなり興奮していた。

さらにアンリエットに従ってアミアンを発ったバッキンガムだが、王太后マリー・ド・メディシスに伝えることがあると理由づけてアミアンに立ち戻る。少し長いが続けて引用する。

イギリス王妃とシュヴルーズ夫妻は即座にイギリス人たちとブローローニュに向けて出発された。そこにはイギリスの艦隊が到着していた。しかし間もなく嵐がおこり、イギリスへと出航することを妨げ、1週間足止めした。その間二人の王妃はアミアンにとどまっていた。王妃はシュヴルーズ夫人に対して友情を抱いておいでだったので、その知らせ、ことに遅滞についての知らせを待ち望んでおられたのである。王妃はそういった理由と、またアミアンで起こったことと、庭での出来事と呼んでいたことについてシュヴルーズ夫人に知らせるために、わたしを駟馬でブローローニュに派遣され、イギリス王妃がブローローニュに滞在される間その地を行き来していた。わたしはシュヴルーズ夫人に手紙を運んで行き、その返事を大手柄であるかのように持ち帰ったものであった。というのも、王妃はショーヌ公に、何ものもわたしを遅らせることがないように、町の門を夜中開けておかせるよう、命じていらしたほどであるので。嵐にもかかわらずイギリスから短艇が到着し便りをもたらした。その中にはバッキンガム氏とホランド氏が直接王太后に運ん



で来なければならないような非常に重大な知らせがあった。わたしはこのかたたちと一緒にブローニュを出発することになり、アミアンまで同道し、町の入り口で別れた。このかたたちは司教館にあった王太后の宿舎に行った。わたしは返事と、ブローニュに到着していたバッキンガム夫人が送った羽根の扇を王妃に届けた。お二かたが到着したこと、わたしも同道したこと、を伝えると王妃は驚かれ、そこにいたノジャン＝ボトリュ氏 (Nogent-Bautru) に言われた。

「また戻って来られた、ノジャン、もう解放されたと思っておりました。」

王妃殿下はその日瀉血を受けていらしたので寢床に就いておられた。王妃が手紙をお読みになり、わたしは旅行についての報告を申し上げたのち立ち去り、その夜遅くにしか戻らなかった。(戻ると)あのかたたちを見いだした。王妃が寢床にいらっしゃるのでこの身分の人たちがとどまるのは礼儀にかなわないような遅い時間までとどまっていた。そのために王妃の女官であるラ・ボワッシェール夫人が、公爵たちがいるあいだ王妃のそばにひかえている必要があった。そのことは公爵たちには非常にお気に召さなかったが、王妃付きの女官と士官たちは公爵たちが退出するまで下がらなかった。

翌日、公爵たちは王太后と王妃の宿舎のあいだを行き来したが、しまいには暇を乞い立ち去った。イギリス王妃がブローニュを発たれると同時に二人の王妃はアミアンを出発しフォンテーヌブローの王に会いに行かれた。王は起こったことをすべての報告を受けておいでになり、王妃の敵たちが王と王妃のあいだを裂くために利用することになるこれらのことがらについて、意地悪な解釈によって非常に嫉妬心を燃やしていらした。しかし王太后は真実を証言され、王に、なにごともなかった、すなわち王妃が悪さをしようとしても周囲には見張っているものがたくさんいたのだから不可能だった、またバッキンガムが王妃に敬意と愛情さえも抱くことを妨げることは王妃にはできなかった、とおっしゃらずにはいられなかった。王太后は若い頃に起こったこの種のもっと多くのことがらについて述べられた。これらの言い分はしっかりしたものだったが、王のこの嫉妬を鎮めることはできず、王妃がこの陰謀に関与していたとの疑いを取り除くまでにはいたらなかった。  
(*ibid.*, p.8-10.)

『三銃士』では、アンヌ・ドートリッシュは4回目の面会で庭の無礼に許しを与えているのだが、ラ・ポルトによればアンヌ・ドートリッシュは迷惑を感じていたようである。この場に立ち会っていたのはラ・ボワッシェール夫人で

あった。

さらにラ・ポルトは、王太后マリー・ド・メディシスが嫁を弁護したこと、このあとアンヌ・ドートリッシュの宮廷からデュ・ヴェルネ夫人、ピュタンジュが追放されたこと、そして自分自身もラ・ボワッシエール夫人から職を離れるよう通告されたこと、などを述べている。

### ブリエンヌ

アンリ＝オーギュスト・ド・ロメニー、ブリエンヌ伯爵 (Henri-Auguste de Loménie, comte de Brienne) は大使としてイギリスにいてこの婚姻の交渉に当たった人物である。のちにリシュリユーやマザランの下で外務大臣として活躍する。リシュリユーに重用されていたが、1632年のモンモランシーの乱の際、モンモランシーの部下をかくまってリシュリユーを驚かすような気骨を示すこともあった<sup>12</sup>。アンヌ・ドートリッシュに忠節を尽くした人物であり、アンヌ・ドートリッシュに否定的な証言は残していない。バッキンガムについては、「妄想を膨らませた人物で」「厄介払いできてみな喜びを隠せなかった」<sup>13</sup>と述べている。ブリエンヌはアンジエット新王妃にイギリスまで同行しているのでアミアンの事件の現場近くにはいたはずだが、庭の事件についての証言はない。興味深いのは、ルイ 13 世とともにコンピエーニュにとどまるとは、アンヌ・ドートリッシュに、ブリエンヌ自らが進言したが容れられなかった、もし意見が通っていればアンヌ・ドートリッシュにとって利益になっただろう、と述べていることである。ブリエンヌの進言に反対したのはヴェルヴェ夫人 (Vervet) だという。このヴェルヴェはヴェルネ (Vernet) 夫人の誤記だろう<sup>14</sup>。ヴェルネ夫人は、あとで見るタルマン・デ・レオ証言では、シュヴルーズ夫人と共謀したスキヤンダルの黒幕とされている。

イギリス王妃の出発は王のご不調で遅れた。王はやや持ち直されたので、妹君に同道されたいとお考えであったコンピエーニュまでは行かねばならない、とおっしゃった。そこから先はお二人のフランス王妃、母君とお妃がイ

<sup>12</sup> Brienne, p.9.

<sup>13</sup> Brienne, p.113.

<sup>14</sup> あとに見るラノワ夫人の名前など、ブリエンヌには綴りの間違いと思われるものがある。ヴェルヴェはブリエンヌ自身が勘違いしたか、Paléo 版の編者の読み取りミスによるか、あるいは綴りは正しくて全く違った人物か。ただタルマン・デ・レオなど他の文献にはヴェルネという名は見当たらない。

ギリス王妃に同道してブローニュかカレーまで赴かれるはずであった。こんな中で、王のご不調が続くのなら、王のおそばについて、王に対する義務と夫としての希望を満たして差し上げるために、この旅行を免除していただくようお願い出られるべきでは、と王妃に進言申し上げるのがわたしのつとめだと思った。もし王妃がわたしのこの言葉に従っておられたならば大いに利益を得られただろうに、と思う。しかし王妃はわたしのことばよりヴェルヴェ（ママ）夫人のすすめを好まれた。それに従う理由はここであげるには及ばないほど薄弱であった。シュヴルーズ夫人やほかの女官がたが、王妃がアミアンに行かれる道筋をそらそうと注意しても、わたし以上にうまくやり遂げるとは行かなかった。（Brienne, p113.）

アミアンに到着するとマリー・ド・メディシスが病気になって一行はアミアンに足止めとなる。ブリエンヌはアミアンで舞踏会が開かれたと述べている。

王太后はアミアンに到着されると危ぶまれるほどお病気になられた。しかし医師団がこの病気は長くは続くまいとの希望を与えたので、この地でできる娯楽を楽しもうということになった。ショーヌ公爵夫人が最近出産した子息の洗礼をバッキンガムに頼み、続けて舞踏会を開き、ご婦人がたが、自然の美しさと人工の美しさが与えることのできるきらめきと、イギリス人たちが驚くほどの宝石で身を覆って姿を競い合った。しかし王妃が就中輝いていた。目をくらませるような白さを王妃に与えた自然はほかのどんな美しさもかすませ、王妃は新星のごとくみなを不意打ちにして姿を現された。

バッキンガム公爵も同様に輝いていた。その服装と、その美しい顔立ちで。公爵は喝采を浴びながら踊った。しかし敬意の範囲を踏み外すことはできなかったし、うぬぼれがそれ以上に広がることはなかったに違いない。（*ibid.*, p.114.）

ほかの証言者はアミアンで舞踏会を開いたとは述べていない。王が病気気味で、王太后もアミアンで病気になっているのに舞踏会を開いて研を競う余裕はあったのかどうか。遠慮がちであいまいな表現ではあるが、バッキンガムが王妃に対して敬意を失するような矩をこえる振る舞いには及んでいない、と述べている。

バッキンガムのアミアン再訪については詳細に証言している。バッキンガム

は最初マリー・ド・メディシスを訪ね、続いてアンヌ・ドートリッシュを訪ねた。アンヌ・ドートリッシュは断ろうとするが、女官のラノワ夫人がマリー・ド・メディシスにお伺いを立て、マリー・ド・メディシスが同意したので面談した。ラノワ夫人が同行していたコンデ大公夫人をはじめ貴婦人を招集していた。ラノワ夫人が椅子をすすめたにもかかわらず、バッキンガムは跪いた。

バッキンガムがアミアンに到着すると、王太后殿下へのお目通りを願った。王太后殿下は床に就いていらしたが、お目通りがかなった。殿下にイギリス王からの命令事項を伝え、さらにその後王妃殿下とのお目通りを願った。王妃殿下も床に就いていらっしゃるとの理由でお断りになられようとしたが、お目通りを断ることにせよ、王太后殿下の意見を聴かずにお目通りを許すことにせよ、非難されることのないように女官のラノワ (Lanoy) <sup>15</sup>伯夫人を遣わされた。夫人は殿下に、これは先例ないことであり、王妃が床についていらっしゃる時間に男性が寝室に入ることをお許しになるのは王のお気には召しますまい、と意見を述べた。「おやなぜ許されないでしょう、わたしは許しましたが」と王太后はおっしゃった。年齢や立場の差を盾に取っても良

<sup>15</sup> この Lanoy は Lannoy の誤記だろう。ラノワ伯夫人 (Chailotte de Villiers Saint-Paul, comtesse de Lannoy, femme de Christophe de Lannoy, sieur de la Boissière) は、『三銃士』ではルーヴルでの密会を通告するリシュリューのスパイとして登場する。ラ・ポルトはラ・ボワッシェール夫人と呼んでいる。タルマン・デ・レオによると、この人物は1615年のちのスペイン王フィリップ4世に嫁したルイ13世の妹エリザベートに付き添ってマドリッドに随行したフランス人侍従団の一員であった。しかし1年ほどでフランス人は全員逐い返された。リュイヌ元帥が妻(つまりのちのシュヴルーズ夫人)をアンヌ・ドートリッシュの女官長 (surintendante) に就けようとした際、モンモランシー元帥未亡人は18歳の女官長の下に就くことを好まず引退した。その後任に就いたのがこの人物である。アミアン事件のあと始末でアンヌ・ドートリッシュの女官たちが更迭されたのちも女官にとどまり、ラ・ポルトに侍従職追放を伝達する役割を与えられている。リシュリュー側の人物に設定されるのももっともと思える。La Porte, p.11., Tallemant des Réaux, I, p.67.

Dumas の注釈者 Sigaux は、『三銃士』の中でシュルジ夫人 (Mme de Surgis) と誤記とされるデュ・ファルジス夫人 (Madeleine du Fargis, fille d'Antoine de Silly et de Marie de Lannoy) の旧姓との関わりも示唆するが、ランブイエ氏のいとこでスペイン大使をつとめたデュ・ファルジス伯爵夫妻は、その後反リシュリュー派としてアンヌ・ドートリッシュの宮廷を逐われて国外に亡命しているので、リシュリュー側の間人ではなかっただろう。

かったのだが、ラノワ夫人は遠慮してそれを控えた。しかし面談に同席されるようにと、その時アミアンにいた大公夫人がたや貴婦人がた全員を招集した。機会が与えられたので、イギリス人は王妃のお部屋に参上した。バッキンガムが慣例通りの敬礼をするとラノワ夫人は椅子を運ばせた。というのは王妃がお目通りを許される時には帯帽のものは座らせるというのがしきたりだったからである。公爵は椅子を受けるのを躊躇し、それが自分の国の慣習だとして跪こうとした。イギリスでは王妃に対してはそう接するものである。しかしラノワ夫人は急いで立ち上がらせた。面談は長くはなかった。そして面談の間、わたしが間違っていなければコンデ大公夫人 (Challotte-Marguerite de Montmorency, la Princesse de Condé) とコンチ大公夫人 (Louise, Marguerite de Lorraine, la princesse de Conti) それに何人かの公爵夫人や奥方がベッドのおそばにいた。そのうちの何人かは何らかの不都合を口実に面談に立ち会おうのを控えたいと望んだ。だがラノワ伯夫人が、王妃が快く思われないうし、夫人としては王に知らせなければならぬだろうと伝えさせた。  
(*ibid.*,116.)

あとで引くラ・ロシュフコーやタルマン・デ・レオの証言では、バッキンガムがアンヌ・ドートリッシュの前に跪いたことを情熱の証拠と見なしているのだが、ブリエンヌによると王妃に対して跪くのはイギリス宮廷では慣習であった。

### モットヴィル

モットヴィル夫人<sup>16</sup>は、スペイン滞在歴もあってアンヌ・ドートリッシュの侍従に任ぜられた。終生アンヌ・ドートリッシュに忠節を尽くしているのでラ・ポルト同様アンヌ・ドートリッシュ寄りの証言を残しているはずである。ただ生年が1621年であり、この事件には立ち会いようもない。

王妃が宿舎の庭でされた散策についてたくさん語られています。散歩は常々王妃に従う随行者たちの見ている中でされておりました。そしてわたしは、その場にいてその後わたしに真実を話してくれた人々と会うことができ

---

<sup>16</sup> Françoise Bertaut de Motteville は1621年生まれ、アンヌ・ドートリッシュに仕え、主にフロンド期の出来事についての『アンヌ・ドートリッシュ伝のための回想録』 (*Mémoire pour servir à l'histoire d'Anne d'Autriche*) を残している。

ました。バッキンガム公爵もそこにいらして王妃と話をなさりたかったそうで、王妃の厩舎長のピュタンジュは、このイギリスの殿様がお話しになることを立ち聞きすべきではないと考えてしばらく王妃からはなれたそうです。その時偶然、小径の曲がり角にさしかかり、生け垣でお姿が皆からは見えなくなったので、王妃はすぐに二人きりになってしまっていることに驚き、バッキンガムの情熱のこもりすぎたお気持ちを明らかにご迷惑とおぼしめして叫ばれたそうです。そして厩会長を呼ばれて、離れてしまったことを叱られたそうです。非難されるに違いない、またこの叫びが王のお耳に届いたら色々ご窮地に立たされるのでは、と心配されるよりも、心の中の無実を保たれることを好まれて、この叫びでご自身の賢明さとお身持ちを示されたのです。

(cite par Dulong, p.56-57.)

ラ・ポルトやピュタンジュからの伝聞だろうか。事実を明らかにするというよりもピュタンジュやアンヌ・ドートリッシュの立場に配慮した弁明の口調である。それでもバッキンガムが、ことばのみによるのか行動を伴うのか不明ながら、アンヌ・ドートリッシュに対して何らかの尋常ならざる振る舞いに及んだことは間違いなさそうである。

### ラ・ロシュフコー

ラ・ロシュフコー (La Rochefoucauld) は『回想録』 (*Mémoires*) の中でこの事件について証言している。ただし 1613 年生まれでまだ宮廷に出仕していない。伝聞による証言である。情報源はシュヴルーズ公爵夫人であろう。ラ・ロシュフコーとシュヴルーズ夫人の関わりが深かったのは 10 年以上もあとの 1637 年前後、アンヌ・ドートリッシュがスペインとの秘密通信をとがめられ司法卿セギエの尋問を受けた時期である<sup>17</sup>。ラ・ロシュフコーもシュヴルーズ夫人のスペイン亡命に関わって 1 週間ほどバステューユに収監されている。『回想録』のこの証言を含む部分は 1662 年の初版には含まれておらず印刷するつもりはなかった。したがってアンヌ・ドートリッシュに遠慮する必要もなかっただろうし、シュヴルーズ夫人に遠慮する必要もなかったのだろう。アンヌ・ドートリッシュとバッキンガムの恋がシュヴルーズ夫人とホランド伯爵の陰謀によるものだと言う。

---

17 セギエの尋問のエピソードは『三銃士』第 16 章の中で 1625 年に移し替えて使われている。

ホランド伯爵は若く、見映えが良くシュヴルーズ夫人のお気に召した。かれらの情熱を高めるために、利益同盟を結び、互いに会ったこともない王妃とバッキンガム公爵とのあいだの色事について、同盟を結んだ。(La Rochefoucauld, p.41.)

シュヴルーズ夫人の計画通りアンヌ・ドートリッシュとバッキンガムは互いに気に入り、公の場で自分たちの気持ちを見せたと言う。そしてそういった様子がリシュリューの嫉妬心と誇りを傷つけ、王に不信感を植え付けたと言う。

公が想像できた以上に王妃は愛らしく見え、また、王妃には公は愛するに最もふさわしい宮廷人であるかのように見えたのであった。彼らは最初のお目見えの機会を、二つの王冠にかかわることがらよりもずっと彼らの心に感じ入ることがらについて話すために使った。彼らは彼らの情念の損得にかかわる部分にしか専念しなかったものである。この幸せな始まりは間もなく乱される。王妃に容認されていたモンモランシー公爵 (Henry II, duc de Montmorency) とベルガルド公爵 (Roger de Bellegarde) が冷たくあしらわれ、フランスの宮廷がいかに輝かしいものであっても、バッキンガム公爵の煌めきによって一瞬のうちにかき消されてしまったのである。リシュリューの誇りと嫉妬は王妃のこの行動によって同様に傷つけられた。そして公爵が王妃に受け入れられうるという印象を王にも与えた。(loc. cit.)

バッキンガムの情熱の行き着いた先がアミアンの事件である。ラ・ポルトたちの証言と違って、バッキンガムとホランドは庭に忍び込んでいる。情報源であるはずのシュヴルーズ夫人はその場にはいないことになっている。

みな、結婚についてはすばやく合意してバッキンガム公を早々に立ち去らせることしか考えなかった。公爵としては可能な限り物事を遅らせ、王の嫉妬に遠慮せずに王妃と会うために大使という資格のあらゆる利点を利用して、そして宮廷がアミアンにあり、王妃が一人で庭を散策していたある夜、ホランド伯とともに庭に入り込み、王妃があずまや (cabinet) で休んでいる時に、彼らだけになってしまった。バッキンガム公は大胆かつ行動的な人で、状況の許しがあって、あまりに無遠慮にその状況を利用しようとしたものだから、王妃は侍女を呼ばざるを得なくなり、彼女らに (王妃の) 動揺と混乱

の様子を見せてしまうことになった。バッキンガム公は王妃を情熱的に愛し、王妃にやさしく愛されながら間もなく出発した。王妃を王の憎しみとリシュリュー枢機卿の怒りに曝したままに残し、その別れが永遠のものになるだろう、とバッキンガムは予見していた。結局王妃と二人だけで話す時間を持ってないまま出発した。(loc. cit.)

場所は小径の曲がり角ではなくあずまや<sup>18</sup>であり、親密な空間である。動揺と混乱していたのはバッキンガムではなくアンヌ・ドートリッシュである。

ラ・ポルトの証言とは違って翌日の急な来訪でもバッキンガムは情熱的なさまを見せている。寝台の下に跪いて涙を流している。アンヌ・ドートリッシュも感じ入らなくもなかったようである。

しかしバッキンガム公は愛による場合のみ許されうるような激情に押され、翌日言い訳もなく急ぎアミアンに戻って来た。王妃は寝床につかかれていた。公爵は寝室に入り込み、王妃の膝元に身を投げ、涙にくれながら王妃の手を取った。王妃の侍女であるラノワ夫人が、椅子を運ばせ、王妃様には跪いて話申し上げるものではないと述べた時、王妃は全く心動かされなかったという風でもなかった。夫人はこれから先の長くはない会話の立会人となった。バッキンガム公は王妃の宿を出、馬に乗ってイギリスへの道に戻って行った。このようなただならぬ振る舞いが宮廷に何を引き起こしたか、王と王妃の間柄を陰悪するために枢機卿にどのような言い分を提供したか容易に信じられる。(loc. cit.)

ブリエンヌは王妃に対しては跪くのは慣習であると言うが、ラ・ロシュフコーが伝えるフランス側は尋常ではないと理解した。

### タルマン・デ・レオ

タルマン・デ・レオもその場にいたのではなく、伝聞である。年齢でも当事者たちとの親しさから言っても直接的な証言ではあり得ない。『逸話集』の執筆は1658-9年前後と推定されるので30年以上後の記述である。ラ・ロシュフ

<sup>18</sup> Cabinet は石造か木造の亭。あるいは構築物とは限らず緑の奥まった場所も指す。足をとめたり、座って話し込んだりできる空間である。



コーの『回想録』を参照しているようである<sup>19</sup>。ラ・ポルトやモットヴィルと違って、アンヌ・ドートリッシュのそばにいたのはデュ・ヴェルネ夫人 (Antoinette de Luynes, madame du Vernet) だと言う。『三銃士』ではピュタンジュ、シュヴルーズ夫人とともに更迭されたとされる人物である。ラ・ポルトもこの人物は事件後更迭されたと述べている。タルマン・デ・レオは、デュ・ヴェルネ夫人はリュイヌ元帥の妹つまりシュヴルーズ夫人にとっては義理の妹であり、シュヴルーズ夫人、ホランド伯による陰謀の共謀者とまで言う。

事件の描写は遠慮がない。アンヌ・ドートリッシュの当惑は単に思いがけない告白に驚いたのではなく、バッキンガムは王妃を押し倒し、太ももに傷をつけたからだ、としている。タルマン・デ・レオは下世話な挿話を好んで蒐集していたこと<sup>20</sup>は考慮に入れなければならないかもしれないが、ラ・ポルトもバッキンガムが言葉以上の振る舞いに進みそうだったと遠慮がちに述べているのだから、あながちタルマン・デ・レオが大げさに述べているのではなかろう。

この件 (英仏の縁談) について話すためにフランスに派遣されていたカーライル伯爵とホランド伯爵が、イギリス王の寵臣であって、頭の中がロマンスでいっぱいバッキンガムに、フランスには色好みの王妃がいて、立派な獲物になるだろうと話した。それ以来ホランド伯爵が事情を伝えたシュヴルーズ夫人を介してふたりのあいだでやり取りがあった。そういったわけでバッキンガムがイギリス王妃の結婚のために到着した時には、王妃は公爵を迎

---

<sup>19</sup> タルマン・デ・レオが参照した資料については、編者の Adam による『逸話集』の序を参照。ラ・ロシュフコーの『回想録』の執筆時期については OEuvres, p.13-14. 参照。編者の Marchand によれば、『回想録』の執筆時期については、3章から6章がマザランの死亡 (1661年) あるいはパリ帰還 (1559年) 以前に、2章はそれよりあとだが初版出版 (1662年) より前、初版には含まれていない1章は2章執筆よりあとにしている。しかしタルマン・デ・レオがシュヴルーズ公爵夫人のスペイン逃亡について述べる部分は『回想録』を出典としていられると思われる。タルマン・デ・レオは印刷されていない第1章については手稿のコピーを参照できたのだろう。また Adam は、『逸話集』の本文の執筆を1659年末以前と推測しているので、『回想録』第1章の執筆時期は1659年までさかのぼるのかもしれない。

<sup>20</sup> たとえば、ジェームズ1世がバッキンガムを愛撫する姿を見て、<Per Dio, sta gente non e mica barbara.> 「なんとまあ、この人たちが蛮人なんてことは全くありませんな」と評したイタリア人の挿話がある。言うまでもないが、二人の関係を男色と示唆している。Talleyrand des Réaux, I, p.190. et II, p.740.

える心境になっていた。大いに交流があったのだが、一番うわさになったのは、できるだけ英仏海峡に近づくために宮廷がアミアンにあった時、バッキンガムが王妃と庭で二人きりになったことである。少なくとも、亡きリュイヌ氏の妹である、王妃の着付け係であったデュ・ヴェルネ夫人しかいなかった。しかし夫人は共謀者であったし、遠ざかっていた。色男は王妃を押し倒して太ももに刺繍の入った股引 (chausses) で擦り傷を負わせた。しかしうまく行かなかった。というのは、聞こえぬ振りをしていた衣装係も助けに来ずにはいられないほどに王妃は叫んだのであった。(TallemantdesRéaux,I, p.239-240.)

再度の来訪についても証言している。

何日か続けて、王妃はアミアンに残っていた。気分が優れなかったのか、イギリス王妃に海まで同道するには必要はなかったからか。というのはそうしても当惑することにしかならなかっただろうから。バッキンガムはほかの者たちと一緒に王妃に暇を乞っていたが、3里も離れぬうちに戻って来た。そして王妃が何も考えていなかったところへ、ベッドの枕元にひざまずいたバッキンガムを見いだすことになった。公爵はしばらくそこにいて、シーツの端に口づけして立ち去った。(loc. cit.)

### そして事實は？

以上5人の証言の異同を見てみよう。

アミアンの夜の庭でアンヌ・ドートリッシュとバッキンガムにただならぬことが起こった。ラ・ポルトやモットヴィルというアンヌ・ドートリッシュに忠実だった人物たちも、夕方のやや暗くなりかけたころの散歩の途中、バッキンガムが植え込みの陰でアンヌ・ドートリッシュを愛撫するような振る舞いに及んだ、と認めている。ブリエンヌは、敬意の範囲内だったとして詳しくは述べないが、歯切れの悪さが何かを想像させてしまう。ホランドとシュヴルーズ夫人に共謀があったとは、仮に事実であっても近く仕えるものたちは明言できないだろう。やや離れた証言者であるラ・ロシュフコーやタルマン・デ・レオは、シュヴルーズ夫人とホランドの共謀を指摘する。タルマン・デ・レオはデュ・ヴェルネ夫人もシュヴルーズ夫人の共謀者と述べているが、ブリエンヌがヴェルヴェ夫人と呼ぶ人物がデュ・ヴェルネ夫人だとすると、ブリエンヌの進言を覆してアンヌ・ドートリッシュにアミアンまで足を運ばせようとしているのも

意図的かと疑いたくなる。その後デュ・ヴェルネ夫人が侍従職を逐われているのは事実であるし、シュヴルーズ夫人も妊娠中にもかかわらずイギリスまで旅を続け帰国しない。シュヴルーズ夫人を要として、前夫の妹のデュ・ヴェルネ夫人が王妃にアミアンまで行くように勧め、前夫の弟ショーヌ公が舞台を用意し、現在の愛人であるホランド伯と夫人でバッキンガムの背中を押す。この布陣では、ルイ 13 世が謀略を信じて無理からぬところだろう。

バッキンガムはアミアンを出発したあと、アンリエット王妃一行と別れてアミアンに戻っている。マリー・ド・メディシスに面会したのちアンヌ・ドートリッシュとも面会している。アンヌ・ドートリッシュにとって思いがけない来訪ではあったようだ。ラノワ夫人が椅子をすすめているが跪いている。ブリエンヌは跪く行為を慣習の違いと述べるが、フランス側はバッキンガムの熱情の現れと解釈した。ラ・ロシュフコーでは涙を流し、タルマン・デ・レオでは寢床のシーツに接吻する。

アミアンの事件についての記述はアンヌ・ドートリッシュとの親密さの度合い、時間的な距離が離れるほど露骨になっている。文字に定着されなかった会話では、もっと遠慮のない噂が交わされていたのだろう。

デュマの時代錯誤についても指摘しておこう。デュマは、1625 年にはバッキンガムが公然とパリを訪れることができないとする話の都合上、アミアンの事件を 3 年前の出来事であるとする。筋書きの都合に目くじらをたてる必要はないだろうし『三銃士』だけであれば特に破綻しないが、アンリエットが 1625 年にチャールズ 1 世に輿入れできなければ、続編の『二十年後』が成立しなくなってしまう。

#### 4 ダイヤモンドの房飾り

アミアンの事件は『三銃士』の中では 3 年前の出来事だとして回想に追い込まれてしまっている。それに対してダイヤモンドの房飾りをめぐる冒険は『三銃士』の中では筋書きそのものである。これもデュマの創作ではない。ラ・ロシュフコーが粉本である。ラ・ロシュフコーによる房飾りの冒険は次のようなものである。

そして（バッキンガム）公がイギリスでカーライル伯爵夫人に長く愛着を持っていたことを知っていたので、枢機卿はこの女性の誇り高く嫉妬深い性

質を、かれらの感情の順応性と彼らの利益によってかくも器用に利用することができたので、この女性はバッキンガムにとって最も危険なスパイになった。公爵の不実に復讐したいという欲求と枢機卿に自らを高く売り込みたいという欲求がこの女性を、枢機卿が王妃に対して抱いている疑いの確かな証拠を与えるためにあらゆる手段をとるよう仕向けた。バッキンガムはすでに言ったようにみやびで豪華であったので、集まりで着飾ることに気を使っていた。公を見張るのに興味津々であったカーライル伯爵夫人は、公爵が見たことのないダイヤモンドの房飾りを着飾るかのように装っているのに気付いた。伯爵夫人は王妃がそれを公爵に与えたと疑わなかった。しかしさらに確かめるために、とある舞踏会でバッキンガムと二人で話す暇を持ち、枢機卿に送るべくそれを切り取った。バッキンガムはその晩に何をなくしたのか気付き、まずはカーライル伯爵夫人が房飾りをとったのではないかと判断して、彼女の嫉妬の結果とそれらがアンヌ・ドートリッシュを破滅させるために枢機卿の手に帰することを心配した。この窮地にあつて、公は瞬時にイギリスのあらゆる港を閉じるように命令を発し、指示した時期より前にはどのような理由があろうと何人も出ることを禁じた。その間誰かが盗んだ房飾りに似たものを急ぎ作らせ、それを王妃に送り、何が起こったのかを知らせた。港を閉鎖するという用心はカーライル伯爵夫人を足止めし、バッキンガムにこの陰謀に備える十分な時間があつたことを夫人は理解した。こうして王妃はこのいら立った女性の復讐を避け、枢機卿は王妃をとっちめ、王にあらゆる疑いを明るみに出す確かな手段を失った。なぜなら房飾りは王から与えられたものであり、王が王妃に与えたものであつたのだから。(La Rochefoucauld, p.42-43.)

房飾りの複製作り、ダイヤモンドの国外移送を阻止するための全港湾封鎖など、デュマがラ・ロシュフコーに多くを負っていることは明らかである。1624年にフランスとともに特命大使としてパリに来たカーライル伯爵の夫人がバッキンガムの元愛人であり、つまりミレディことウィンター伯夫人のモデルであることがわかる。ただ、ラ・ロシュフコーの記述は果たして事実かどうか。先に見た通り、ラ・ロシュフコーはこの頃宮廷に出入りしてはいないし、『回想録』の執筆も事件の30年もあとである。できすぎた筋書きなのでラ・ロシュフコーの創作を疑いたくなる。ほかに出典があるのか。

プレイアッド版の編者 Sigaux によれば、デュマの黒衣の Auguste Maquet が

Roederer の *Mémoire pour servir à l'histoire de la société en France* (1835 年刊) を紹介したという。Roederer は、ダイヤモンドの房飾りアンヌ・ドートリッシュから手渡されたのではなく、送られたという。また同じ Roederer は、*Intrigues et galantes de la cour de France sous Charles IX, Louis III, Louis XIII, Louis XIV, la Régence et Louis XV, mises en comédie* (1832 年刊) の中で、*Les Aiguillettes d'Anne d'Autriche* という 1625 年の劇に言及しており、その劇の主題は、王から王妃に与えられた 12 個のダイヤモンドの房飾りのついた青いリボンから 2 個の房飾りがバッキンガムによって切り取られ、さらにリシュリューの手に落ちる、というものだという。Roederer は出典としてラ・ロシュフコーとブリエンヌを挙げているという。Sigaux も 1625 年刊と称する劇作品は確認していないようで、この事件についての同時代の証言は結局ラ・ロシュフコーによるものしかない<sup>21</sup>。しかし房飾りそのものは存在したらしい。Dulong によれば、アンヌ・ドートリッシュの死亡時の財産目録は「6 個のダイヤモンドの房飾り、全体で 700 リーヴル」に言及している<sup>22</sup>。あいにく目録上にダイヤモンドの房飾りの存在が記載されているだけで、ラ・ロシュフコーの記述の信憑性の証拠にはなりそうにない。

### 房飾りの役割は

房飾りをめぐる冒険が事実かどうかは別として、房飾りの役割についてはデュマとラ・ロシュフコーには理解に違いがありそうである。

鈴木訳によると「房飾り」、生島訳では「飾緒」と訳される ferret とは何か。ferret とは胴着やコルセットをしめるための紐やリボンの先端につけた金属製（語源は鉄 fer である）や鉋物製の飾りで、主に紡錘型であった。胴着やコルセットの穴を通さなければならないのだから先端の ferret はそれほど大きなものではありえない。装飾品というより実際的な用途を果たしていた。類語に aiguillette がある。

デュマによると、ラノワ夫人から小箱がなくなっていることの報告を受けた

<sup>21</sup> Dumas, p.1620.

<sup>22</sup> Dulong, p.65.によれば、アンヌ・ドートリッシュは結婚当初は房飾りを所有していない。というのはともに 1617 年に作成されたスペインから持参した宝石類の目録にも、王から贈られた宝石目録にも、ダイヤモンドの房飾りは見当たらないからである。したがってアンヌ・ドートリッシュが房飾りを手に入れたか、あるいはラ・ロシュフコーが言うように夫に贈られたのは、これよりあとである。

リシュリユーは、12個の房飾りのうち2個を切り取ることをミレディに命じている。慧眼のリシュリユーはバッキンガムが12個すべてを舞踏会で身につけると予見し、実際バッキンガムは12個全部を身につけて舞踏会に参加し、2個をミレディに切り取られ、ダルタニャンに指摘されるまで切り取りに気付いていない。

女性用の房飾りを男性用の胴着につけて違和感がなかったものかどうかはわからないが、12個を身につけたのだから、本来の用途として胴着の穴に紐を通して先端の房飾りを見えるようにしたのだろう。バッキンガムは豪華に宝飾品を身につけていることはポルトスが証言している。宝飾品を多く身につけるのが常であったバッキンガムの胴着を留める紐の先端の12個のダイヤモンドはそれほど目立ったものであったかどうか。リシュリユーに指示されなければウィンター伯夫人も特別なものと気付いたかどうか。

ラ・ロシュフコーはバッキンガムが房飾りをどのように身につけたかは述べていない。しかしカーライル夫人は、リシュリユーに予告されたのでもないのに目ざとく気付いている。なぜカーライル夫人は房飾りに着目できたのだろうか。

指輪、首飾り、鎖または服の一郎、ことにリボン、愛や友情のしるしとして女性から与えられた。幅の狭いリボンには今も *faveur* という呼称が生きている。リボンは *Furetière* によれば「何かを結び、つなぎ、締めるための平らな布。服を飾るためにも使う。幅の広いもの、半ばのもの、そしてかつては *faveur* と呼ばれていたせまいリボン (*nonpareille*) がある」<sup>23</sup>。また *Huguet* によれば、女性が身につける指輪、紐、スカーフ、リボン、そして飾り結 (*aiguillette* や *ferret*) などのさまざまな小物が *faveur* と呼ばれる標識の役割を果たす。それらはご婦人から男性に与えられ、男性はそれを身につけて誇示した<sup>24</sup>。

現実に房飾りのやり取りがあったとしたら、バッキンガムにとってもアン

<sup>23</sup> *ruban* の項。

<sup>24</sup> 「指輪、紐、スカーフ、リボン、そして飾り緒 (*aiguillette* や *ferret*) などは、ご婦人から男性へ友情の印としてあるいは思い出のよすがとして与えられ、*faveur* と呼ばれた。そしてそれを身につけて誇示することが習慣であった。」

(Une bague, un cordon, une écharpe, un ruban, voir jusqu'à une aiguillette, étant donnée par une dame ou une demoiselle à un gentilhomme en signe d'amitié et pour vouvenance, est appelée une *faveur*: et la coutume en quasi de tous est de porter ceste *faveur* et en monster.) *Huguet*, *faveur* の項。

ヌ・ドートリッシュにとって房飾りの価値はダイヤモンドの宝飾品としての価値にはなかつたはずである。それが、アンヌ・ドートリッシュが身につけていたものの一部であったからこそバッキンガムにとって貴重であったはずだ。コルセットを締め付けるリボン（とその先端にある房飾り）はすぐれてフェティシズムの対象になりそうである。たとえばロンサールが「あなたの美しい乳房を絞めるリボンになりたい」<sup>25</sup>と歌ったように。多分バッキンガムはこれ見よがしに房飾りを誇示していたのだろう。『笑うべき才女』のマスカリーユのように体中リボンだらけの服装だったのではなく、特別な飾りだとわかるように誇示したに違いない。ダイヤモンドとしてではなく、服の一部であるリボンの切れ端として、誇らしげに見せつけたに違いないし、カーライル夫人が新しい *faveur* に気付くのは当然であったはずだ。

それに対して『三銃士』の小道具としての房飾りはダイヤモンドという材質が強調され、バッキンガムが複製に費やした金額の巨大さが強調される。ほかにもダイヤモンドと言え、ダルタニャンも感謝のしるしとしてアンヌ・ドートリッシュからダイヤモンドの指輪を受け取る。しかしトレヴィルはそれをさっさと売り払うようにすすめるし<sup>26</sup>、アトスはダルタニャンに無断で賭けてしまう<sup>27</sup>。デュマの登場人物たちは、王妃の肌に触れていたもののフェティッシュな価値には無感覚のようである。

デュマはラ・ロシュフコーを利用しながら、房飾りに込められた感情には無頓着である。ラ・ロシュフコーが語る房飾りにはアンヌ・ドートリッシュやバッキンガムそしてカーライル夫人の情念がこもっていたはずだが、デュマではリシュリューの罫に使われる小道具でしかない。ラ・ロシュフコーが語る房飾りの物語は事実ではなかったかもしれない。しかしラ・ロシュフコーがアミアンの庭の出来事に続いて房飾りの物語を語る時、読者はこのような贈り物の意味を理解するだろうと考えていたに違いない<sup>28</sup>。すなわちアンヌ・ドートリッ

<sup>25</sup> Je voudrais être le riban  
Qui serre ta belle poitrine  
*Odes*, IV, 32. (Ronsard, I, p.837.)

<sup>26</sup> Dumas, p.256., 生島訳 347 ページ、鈴木訳 375 ページ。

<sup>27</sup> Dumas, p.330., 生島訳 443 ページ、鈴木訳 476 ページ。

<sup>28</sup> 『回想録』の出版をラ・ロシュフコーは予定してはいなかった。しかし読者を想定していなかったはずはない。手稿のコピーは作者の手をすぐに離れて

シュはバッキンガムの愛を受け入れた、と解釈すると。

### 5 事件はどう語られたか

アンヌ・ドートリッシュとバッキンガムの関係は同時代にどう語られていたのか、ヴォワチュール (Vincent Voiture) の二つの詩と、レ (レス) 枢機卿 (Jean François-Paul de Gondy, cardinal de Retz) の回想を見てみよう。

#### ヴォワチュールのボン・ブルトン

ヴォワチュールにはアンヌ・ドートリッシュとバッキンガムに言及する詩が二つある。一つはボン・ブルトン (Pont-Breton) という形式の 6 行からなる短詩である。もう一つは後年アンヌ・ドートリッシュが摂政王太后となったころ王太后自身に向けて書かれたスタンザ (Stance) である。ボン・ブルトンはタルマン・デ・レオによって、『逸話集』のベルガルド公爵の項で引用されている。タルマン・デ・レオは言う。

色事について言うとアンヌ・ドートリッシュ王妃に対していただいた恋心がこの人物の最後の恋だと思ふ。この人はほとんどいつも「ああ、死んでしまう」と言うのが口癖だった。ベルガルドがある目王妃に、誰かが恋を打ち明けたらいかがなさいますかとたずねると、王妃は「その人を殺してしまうでしょうね」と答え、ベルガルドは「ああ、死んでしまう」と叫んだとか。とはいえ王妃はこのアンリ 3 世の宮廷に伺候した人物を去らせたバッキンガムを殺しはしなかった。ヴォワチュールはこの件についてボン・ブルトンを作っている。

ロジェーの星は  
もうルーヴルでは輝かぬ  
たれもが知る  
一人の羊飼ひ  
ドーヴァーから来たりて  
それを追い払ったと。<sup>29</sup>

---

出回っていたはずだ。タルマン・デ・レオも手稿を手に入れていたし、そもそも『回想録』の初版も本人の意志を離れて流通していたコピーが印刷されたものであったのだから。

<sup>29</sup> Tallemant des Réaux, I, p.27., Bellegarde の項、拙訳による。Lafay, I, p.120.ボン



ボン・ブルトンという詩形は 6 行からなり、韻の形式は abbaba となる。短くその場の状況に即応した機会の詩のためか 17 世紀のヴォワチュールの作品集には収められておらず、この作品も含めてタルマン・デ・レオが『逸話集』の中で引用している 3 編のみが伝わっている。

ベルガルドはアンリ 3 世の時代から宮廷にあって、色好みの人物であった。アンリ 4 世の時代にはガブリエル・デストレ (Gabrielle d'Estrées) を愛人としていたが、この女性をアンリ 4 世に取り上げられてしまった。先に見たラ・ロシュフコーもタルマン・デ・レオも当時アンヌ・ドートリッシュに想いを寄せていた人物としてほかベルガルドとモンモランシー公爵の名前を挙げている。本気か冗談か、60 歳を超えたベルガルド公爵がアンヌ・ドートリッシュをドン・キホーテのように恋慕していようとルイ 13 世は嫉妬しないが、30 歳そこそこの姿形の良い隣国の権力者が尋常ならざる振る舞いに及んだとすると *persona non grata* (好ましからざる外交官) になってしまう。

### Je pensais...

しかしヴォワチュールは、この事件を本人に向かって冗談の種にした。事件から 15 年経って、直接の役者たちがほとんど亡くなったあとだが、一人残った当事者である摂政王太后アンヌ・ドートリッシュに向かってこの事件に言及する詩を書き、アンヌ・ドートリッシュもそれを受け入れている。各連 (スタンズ) が *Je pensais* で始まる 57 行からなるスタンザ (スタンズ) である。

わたしは考えておりました。

宿命が多く of 不当な厳しさのあとに、

栄光と輝きと名誉の冠をあなた様に戴かせたことを。

こうも考えておりました。

あなたは、あの頃もっとお幸せ (*heureuse*) だったろう、

あのようにお見うけできた頃は、

---

ブルトンの原文は以下の通り。

L'astre de Roger  
Ne luit plus au Louvre;  
Chascun le descouvre,  
Et dit qu'un berger  
Arrive de Douvre,  
L'a fait desloger.

愛していらした (amoureuse) 頃は、とは申したくありませんが、  
そう申せば韻がよく合います。(1-8)

わたしは考えておりました。  
あなたに常に魅惑を与えたあのあわれなアモール恋は、  
あなたの宮廷から遠くに、  
それ自身も、その弓も、矢も、その武器もともに追いやられたのだと。  
そして今あなたのそばでわたしの生を過ごしながら  
わたしが望めるものは何であるかを、  
もしあなたにこれほど良く仕えたものに、あなたが  
こんな邪険な仕打ちがおできになるとすれば。(9-16)

わたしは考えておりました。  
わたしども詩人と申すものは大袈裟に考えるものです  
あなた様がいらっしやるきらめきの中、  
今このとき何をなさるだろうか  
この場にバッキンガム公爵を  
お呼びになろうとされるならば  
公爵とヴァンサン師の  
いずれが不興をこうむるのだろうか。(17-24) (後略) 30

---

<sup>30</sup> Lafay, I, p.59-60. Ubcini, II, p.307. 拙訳による。Lafay による原文は以下の通り。Ubcini による異同はパーレン内に示した。

Je pensais que la destinée,  
Après tant d'injustes rigueurs,  
Vous a justement couronnée  
De gloire, d'éclat et d'honneurs,  
Mais que vous étiez plus heureuse,  
Lorsque vous étiez autrefois,  
Je ne veux pas dire amoureuse,  
La rime le veut toutefois.

Je pensais que le pauvre amour  
Qui toujours vous prêta ses charmes  
Fut banni loin de votre cour,  
Lui, son arc, ses traits, et ses armes,  
Et ce que je puis espérer (profiter U.)  
En passant près de vous ma vie,

こちらもヴォワチュールの 17 世紀の作品集には収められていない。最初に印刷されたのは 1723 年アムステルダムで出版されたモットヴィル夫人の『回想録』に 3 連のみが引用された形によってである。モットヴィル夫人によると。

王太后がリュエイユにご滞在の間、ある日馬車で庭を散策のおりヴォワチュールが散策しながら夢想しているのに気付かれた。王太后は何を考えているのか尋ねられた。するとヴォワチュールはながく考えることなく滑稽な詩を王太后に披露した、それは面白くかつ大胆なものであった。王太后はその揶揄に気を悪くされなかった。上手とおぼしめして、ながく手文庫にしまっておられた。(Ubicini, II, p.307. Lafay, I, p.59-60.)

タルマン・デ・レオもこの詩をヴォワチュールの大胆さの例としてあげている。

王太后への詩 *Je pensois... (sic)* 中で、王太后に対してさえ手加減しなかったことがうかがえる。というのはその詩の中でヴォワチュールは、王太后がバッキンガムに恋をしていた、と本人にざっくばらんに言っているからである。

(Talleyrand des Réaux, I, p.491.)

またタルマン・デ・レオはヴォワチュールの『作品集』初版の手沢本に、書簡や詩の背景を説明する注を付けているが、その注は、ヴォワチュールの筆致が大胆ながら王太后アンヌ・ドートリッシュのお気に召したことを伝えている。

Si vous pouvez si maltraiter  
Un qui vous a si bien servie.

Je pensais, car nous autres poètes,  
Nous pensons extravagamment,  
Ce que dans l'Eclat où vous êtes,  
Vous feriez si dans ce moment  
Vous aviez en cette place  
Venir le Duc de Bouquinken, (Bukingham U.)  
Et lequel serait en disgrâce  
De lui ou du Père Vincent.

24 行目のヴァンサン師は Vincent de Paul アンヌ・ドートリッシュの告解神父であった。

摂政期の初め、摂政王太后が馬車でリュエイユを散策の途中、夢想するヴォワチュールに出会われた。は何を考えているかお尋ねになり、そのことについて詩を作るように命じられた。彼はこの詩を作り皇太后にお見せした。王太后はお笑いになった。というのは、ヴォワチュールは王太后にとってなじみであったから。1650年にヴォワチュールの甥であるマルタン (Martin Pinchène) が、ギユイエンヌ地方から戻った際、ヴォワチュールの初版よりずっと厚くなったこの本の第2版を皇太后にお見せした。王太后はこの詩をお探しになり、この詩がないことに気付かれ、この詩も掲載されることを望まれた、みな持っているのだから。(Ubicini, II, p306. Tallemant des Réaux, I, p.1123.)

Lafay によるとこの詩は17世紀の手稿として11点が国立図書館ほかに残っている。タルマン・デ・レオの証言通り、印刷されなくともコピーは出回っていたのであろう。バッキンガムやルイ13世やリシュリューの死後とはいえ、ヴォワチュールの大胆さが例外的なのか、王太后となったアンヌ・ドートリッシュがその大胆さを許容できるほど時代はおおらかだったのか。

### レ枢機卿

さらに遅く間接的な証言だが、レ枢機卿もバッキンガムとアンヌ・ドートリッシュの愛を語っている。シュヴルーズ夫人からの伝聞である。かなり後年の、シュヴルーズ公爵夫人がアンヌ・ドートリッシュとは挟を分かってのちの聞き書きであり、シュヴルーズ夫人の証言は好意的ではない。レはイギリスで生まれたシュヴルーズ夫人の次女シャルロット (Charlotte-Marie de Lorraine) を愛人としていた<sup>31</sup>。

(シュヴルーズ夫人はこう言った。) 王妃が情熱を持って愛した唯一の人はバッキンガムだった。王妃は一夜、ルーヴルの小庭で会見の機会を与えた。そこにはシュヴルーズ夫人だけが少し離れて立ち会った、二人の人物が争うような音を聞いた。シュヴルーズ夫人が近づくと王妃はかなり心乱された様子であり、バッキンガムが王妃の前に跪いていた。その夜王妃は居室に戻る際にシュヴルーズ夫人に、男はみな乱暴で無礼だと言っただけだったのだが、

<sup>31</sup> シャルロットがレの愛人であったのは1649年から1652年の間であり、『回想録』の執筆は1675年から1677年である。

翌朝バッキンガム氏に王妃が妊娠される危険がないと確信しているかどうか尋ねるように命じた。そしてこの出来事以来、シュヴルーズ夫人は王妃の色事については何も知ることはないと言った。(Retz, p.720-721.)

レの証言は、シュヴルーズ夫人からの伝聞であることを明言しているし、日時は不明確だし現場もアミアンではなくルーヴルの小庭とするなど、事実の証言としての価値はないだろう。しかし王妃と隣国の寵臣が屋外で乱暴な行為に及んで、王妃が妊娠の可能性を心配していた、とは遠慮のない証言である。フロンドの乱で敵対し、すでに物故した人物についてであるとはいえ、このような遠慮のない話が、匿名ではなく公言されることに驚かされる。

## 6 さいごに

バッキンガムが王妃のベッドの横で跪いた時、バッキンガムは個人的な情念につき動かされて跪いたのか、イギリス流の身振りとして跪いたのか。フランスの宮廷人たちはそれを情念の発露と解釈した。アミアンの事件の真相がどうであったかはわからなくても、ルイ 13 世がどう思ったかはわかっている。ルイ 13 世の指示で、アンヌ・ドートリッシュの侍従たちは追放され、バッキンガムはフランス本土に二度と上陸することはできなくなった。現実が起こったことがらよりも、起こりうることとして語られることが現実を動かす。密室での出来事は、事実よりも憶測や噂によって重大な影響を招く。

ラ・ロシュフコーが房飾りの冒険を語る時、デュマが無視した情念的な価値こそが房飾りの価値であることを意識していたはずだ。カーライル夫人も当然その価値観を共有していた。だからこそリシュリューの知らせもなく房飾りに目を止めたはずだ。王妃が外国の寵臣との間の密会はわれわれには考えにくい。しかしあり得ることと認識されていたのかもしれない。Dulong はこの事件を評して言う「時代の文脈におくと、小説的なものと政治の混同(中略)は思ったほど真実らしからぬことではない。17 世紀は奇妙な発展を経験している、「古典」になってしまっていて古典主義の時代の天才たちが第 2 列の栄光を摩耗させてしまっているのである。世紀初めの小説は文学史の教科書には記載されなくなっているにしても、時代の社会の中では重要な位置を占めていた。『アストレ』(1607 年から 1627 年)の目覚ましい成功は数えきれないほどの傍流を生んでいる。牧歌であったり、英雄譚であったり、歴史物語であったりしたこれらの小説群は同一の強迫観念を表明している、すなわち、愛に命をふきこまれない偉大な生などなく、愛は歴史の原動力であり、人間の師傅である、という

こと。」(Dulong, p.50-51.)

真実らしさ (vraisemblance) はこの時代の演劇のコードである。真実そのものよりも真実らしく見えるものこそが舞台に載せる価値があるとされた。王妃の恋は真実らしく受け取られたことは間違いなさそうである。

(2005年9月22日)

## 書誌

- BERTIERE, Simone, *Les reines de France au temps des Bourbons, les deux regents, Marie de Médicis, Anne d'Autriche*, Paris, Fallois, 1996.
- BRIENNE, Henri-Auguste de Loménie, *Mémoires contenant les événements les plus remarquables du règne de Louis XIII et de celui de Louis jusqu'à la mort du cardinal Mazarin (1613-1661)*, texte établi, traduit et présenté par Eric de Bussac et Pascal Dumaih, Clermont-Ferrand, Paléo (Sources de l'Histoire de France), 2004, 2-84909-063-8.
- DUMAS, Alexandre, *Les trios Mousquetaires*, édition présentée et annotée par Gilbert Sigaux, Paris, Gallimard (Pléiade), 1997, 2-07-010180-0.
- DULONG, Claude, *Anne d'Autriche: mère de Louis XIV* (traduit de l'anglais), Paris, Hachette littérature, 1980, 2-01-00474,6.
- FURETIERE, Antoine, *Le Dictionnaire Universel*, 3vols., Paris, Robert, 1984, (reprint de 1'édition de La Haye, 1690), 2-85036-005-8.
- HILLAIRET, Jacques, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, 2 vols., Paris, Minuit, 1985, 2-7073-1053-0.
- HUGUET, Edmond, *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle*, 7 vols., Edouard Champion, 1925.
- KLEINMAN, Ruth, *Anne d'Autriche*, (traduit de l'anglais), Paris, Fayard, 1993.
- LA PORTE, Pierre de, *Mémoires 1624-1666*, Clermont-Ferrand, Paléo (Sources de l'Histoire de France), 2003, 2-84909-043-3.
- LA ROCHEFOUCAULD, *Mémoires dans OEuvres*, édition établie par L. Martin-Chauffier, revue et augmenté Par Jean Marchand, Paris, Gallimard (Pléiade), 1986, 2-07-010301-3.
- RETZ, Cardinal de, *Mémoires dans OEuvres*, édition établie par Marie-Thérèse Hipp

- et Michel Pernot, Paris, Gallimard (Pléiade), 1984, 2-07-011028-1.
- RONCARD, Pierre de, *OEuvres complètes*, II, édition établie présentée et annotée par Jean Gérard, Daniel Ménager et Michel Simon, II, Paris, Gallimard (Pléiade), 1994, 2-07-011337-X.
- TALLEMANT DES REAUX, Gédéon, *Historiettes*, 2 vols., édition établie et annotée par Antoine Adam, Paris, Gallimard (Pléiade), 1990, 2-07-010547-4.
- VOITURE, Vincent, *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, 2 vols., Paris, Didier, 1971. Lafay と表記。
- VOITURE, Vincent, *OEuvres de Voiture, Lettres et Poésies*, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Contart corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissement et des notes par M. A. Ubcini, 2 vols, Genève, Slatkine, 1967. (reprint de l'édition de Paris, 1855). Ubcini と表記。

- デュマ作 生島進一訳、『三銃士』上、岩波書店（岩波文庫）、1970年
- デュマ作 鈴木力衛訳、『ダルタニャン物語 1 友を選ばば三銃士』、講談社、1975年
- エリオット、『リシュリューとオリバーレス』、岩波書店、1988年
- 佐藤賢一、『ダルタニャンの生涯 -史実の『三銃士』-』、岩波書店（岩波新書）、2002年
- 色摩力夫、『黄昏のスペイン帝国 オリバーレスとリシュリュー』、中央公論社、1996年